

大項目	2	持続可能な社会の実現に向けた地球的課題と国際協力			
中項目	2-1	生活文化の多様性と国際理解			
小項目	2-1-2	多文化共生と国際理解			
細項目 (発問)	2-1-2-1 インドの 多様性	インドはなぜ多様なのか、またその多様性はインドにとってどのような意味をもつのか			
作成者名	岡橋秀典	作成/修正年	2020/2021/2023/2024	Ver.	1. 3
キーワード 5~10 個程度	インド、多様性、自然と生活文化、社会、カースト、地域格差、メガリージョン、多文化共生				

### 発問と説明

#### (1) インドを理解する上で、多様性がなぜ重要なのか考えよう。

インドは多様性の国とよく言われます。一つの国の中に多様な要素が混在していて、まさに坩堝と化している面があるからです。自然、宗教、言語、民族、社会集団など、どれをとっても、国内において実に大きな隔たりがあります。インドは一つの国であっても、個々の構成要素の異質性が強いことが特徴です。よく同質的性格が強いと言われる日本とは対極にある国です。それゆえ、インドの特徴を画一的な一言で表すことは難しく、それがまたインドの理解を難しくしているともいえます。ただ重要なことは、そのような多様性を有しながらも、対立よりも共生的な社会として着実に発展していることです。それゆえ、インドを理解するためには、その多様性をしっかりと把握し、またそれがもつ意味を考えることが重要です。そして、このようなインドは、世界における多文化共生の一つのモデルとして捉えることができるでしょう。

#### (2) 地域的多様性はどこからくるのか—自然の多様性。

インドの多様性は、国全体を一括して捉えるだけでは十分に把握できません。インドは地域的な差異が大きいので地域ごとに見ていくことが重要です。しかも、そうした地域を重層的にマルチスケールで捉えることが必要です。例えば、インド全体としてみると自然の多様性が大きいとしても、より小さな地域スケールでみると均質性の強い自然であることも多いのです。

インドは日本の約 9 倍に及ぶ広大な国土と、紀元前のインダス文明に遡る長い歴史をもっています。この特徴を受けてインドでは、まず自然や文化の面できわめて多様な性格が読み取れます。

自然の方から見てみましょう。インド亜大陸は、ユーラシア大陸から広大なインド洋にペンダントのように特徴のある形で突き出しています。この半島としての特徴は、インドの歴史に大きな影響を与えてきました。半島性は海への地理的な開放性をもたらし、港湾の発展など、歴史的に東西の文明を結ぶ中継地としての役割をインドに与えてきました。これに陸域の開放性が加わることにより、インドは人、物、知識が古くから交流する場となり、その結果として多様な文化が併存する場所としての特徴が形成されてきました。

地形が多様であることは、言うまでもありません。図 1 (参照 URL 1) から一目で、標高の大きな違いが読み取れます。北部には、世界の屋根と言われるほど高い山々が連なり、その南には、山脈から流れ出した河川がつくった沖積平野が東西に広がります。南部の半島部は、標高 500~1000m の地域が目立ち、高原の特徴を示します。

最北部のヒマラヤ山脈は新規造山帯に属し、世界一の高俊な山岳地域です。インドプレートがユーラシアプレートに衝突することによって生まれ、今も成長している造山地域です。その南には、ヒマラヤ山脈から流れ出した諸河川がつくった沖積平野、ヒンドスタン平原が広がります。ヒンドスタン平原は、ヒマラヤ山脈から流れてくるインダス、ガンジス、ブラマプトラなどの大河川が運ぶ土砂の堆積によってできた広大な平野です。代表的穀倉地帯で、人口稠密地域となっていますが、洪水に襲われることも少なくありません。そして、南部の半島部の大部分を占めるのがデカン高原です。半島部はゴンドワナ大陸に由来する安定陸塊となっており、長期にわたる浸食で準平原化し、隆起により高原化したデカン高原が広がります。綿作に適する肥沃で保水性の高い黒色の土壌、レグール土が広く分布するのでも有名です。

インドは気候も多様です。ケッペンの気候区分 (図 2、参照 URL 2) で言うと、熱帯、乾燥帯、温帯、冷帯、寒帯と、すべての気候区が分布しています (日本は温帯と冷帯のみ)。西部のタール砂漠のような極度の乾燥地

## 図表のページ

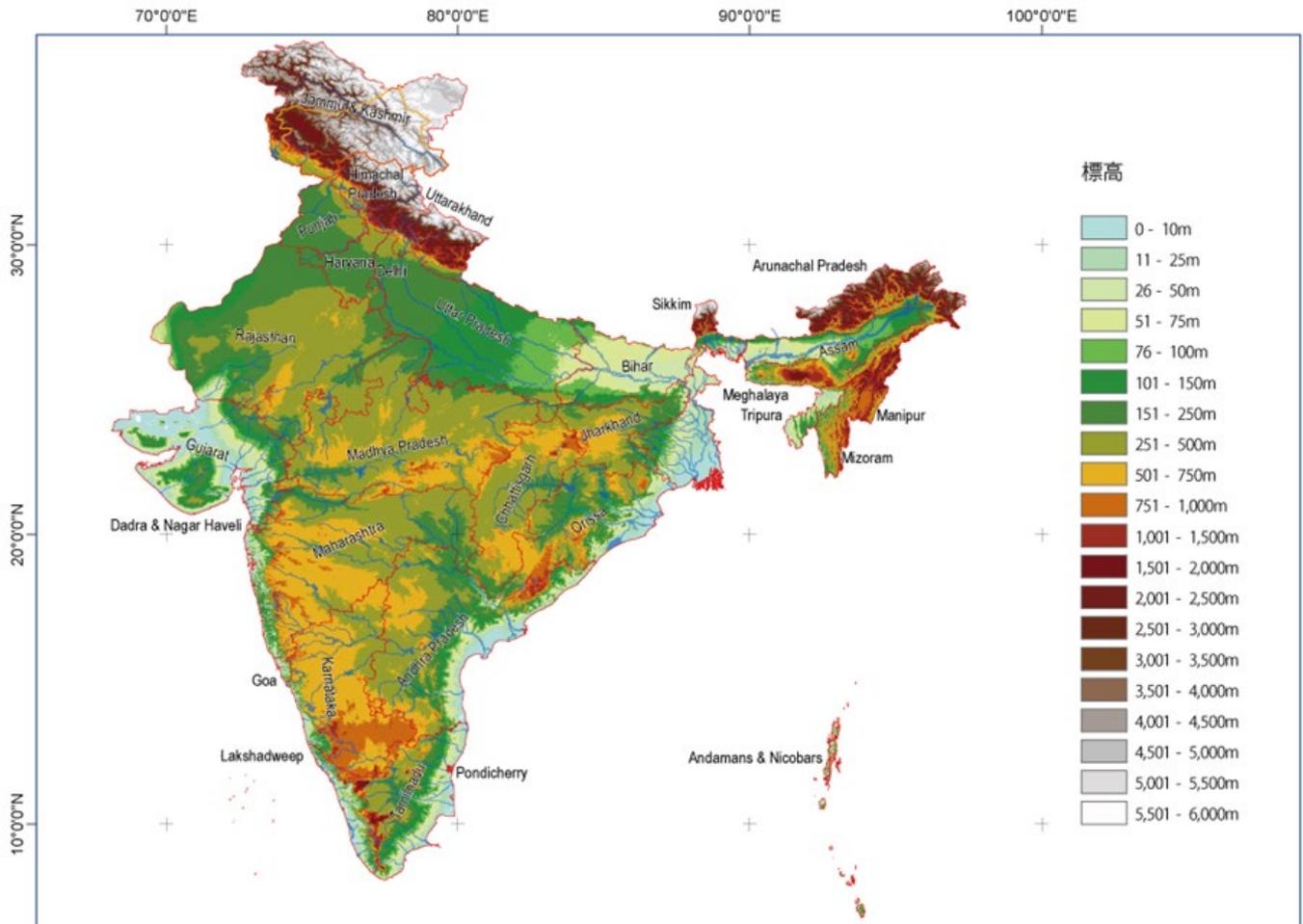


図 インドの地勢図  
 Fig. Topography of India  
 資料：ESRI, ArcGIS9.3 付属データ

### 図1 インドの地勢図

HINDAS 広島大学現代インド研究センター、データベース所蔵図書 デジタルアトラス「インド 2011 年センサスと 2001 年センサスの比較」 ver. 1.0 地勢図 引用 [https://hindas.hiroshima-u.ac.jp/gis\\_database\\_1.html](https://hindas.hiroshima-u.ac.jp/gis_database_1.html) (2022 年 10 月参照)、転載許可 (2021 年 11 月 9 日) 広島大学現代インド研究センター (2024 年 3 月現在, この HP は在りません)

は年降水量 4000mm を超える多雨地域もあります。また、40℃を超える酷暑の地域もあれば、夏でも過ごしやすいヒマラヤ山岳地域もあるのです。こうした多様な気候に大きな影響を与えているのが季節風（モンスーン）です。これにより雨季と乾季が明瞭に分かれる地域が多いのがインドの気候の特徴です。雨季（6-10月）には、インド洋から湿った南西モンスーンが吹き込み、インド半島の西海岸に多量の降雨をもたらします。しかし、半島部では西端の西ガーツ山脈を越えると降水量が一気に少なくなり、そのため、風下側では乾燥気候が大きな面積を占めています。そのため、農業生産は灌漑システムが行き届いてなければ不安定にならざるをえず、干ばつ常習地域となっています。東部では再び降水量が増加していき、特に北東部は世界的な多雨地域となっています。インドは基本的に、西に乾燥、東に湿潤の傾向を示し、東西を隔てる年降水量 1000mm の線は農業地域を小麦作地帯と米作地帯に大きく二分しています。

### （3） 地域的多様性はどこからくるのか—文化の多様性。

インドは文化も多様です。人種・民族の分布で重要なのは、ドラヴィダ族とアーリア人です。インダス文明を担ったのはドラヴィダ族とされていますが、イラン高原方面からきたとされるアーリア人が紀元前 1500 年頃侵入し、紀元前 1000 年にはアーリア文明が北インドを席卷し、さらに南インドへも進出しました。この過程で、ドラヴィダ族との混血が行われましたが、ドラヴィダ族は主に南インドに定着しました。それゆえ、人種・民族の分布か

らは北インドと南インドの対照性が明瞭にみられます。

言語は 4 語族ありますが、人口の大半はインドアーリア語族（北インド）[図 3\(参照 URL 3\)](#)とドラヴィダ語族（南インド）に属しています。[図 4\(参照 URL 3\)](#)のように、ドラヴィダ語族の分布は南インドに偏在していることが明らかです。そのほか、シナ・チベット語族が北東部に、オーストロ・アジア語族が半島中央部に分布します。独立後の州の編成は主に言語に基づいて行われ、この言語州は地域主義の基盤となっています。その意味で、地域的多様性をみるには、州の単位が重要な意味をもつと考えられます。

宗教にも明瞭な地域性がみられます。第二次世界大戦後イギリスインド帝国から独立する時、宗教を基準としてヒンドゥー教のインドとイスラム教のパキスタンの二国に分かれることになりました。その際の大規模な移動は社会を混乱に陥れ、両教徒の間に激しい衝突と暴動、虐殺を発生させたと言われています。このとき生じた両者の不信感そして憎悪が今日のインドとパキスタン両国の関係にも影響しているのです。

インドのイスラム教徒（ムスリム）の割合は 10% 強ですが、絶対数では決して少なくありません。ムスリムの分布は、ガンジス川流域平野部のかつてのムガル帝国の支配圏のほか、ハイデラバードなどかつてのイスラム藩王国に多くみられます。キリスト教は海上交易により古くから半島南西部のケーララ州に定着していましたが、北東インドではイギリス時代の宣教により新たに受容されました。このほか分布に特徴があるのは、15 世紀にヒンドゥーから派生したシーク教で、パンジャーブ州に集中するほか、全国の主要都市に分散しています。

上述のように、文化は地域的な多様性が顕著ですが、その一方で、インド全体、さらに南アジアの範囲で共通するものも数多くあります。例えば衣服では、成人の女性服の代表と言えるサリーがこの地域では広く着用されています。また食文化では、香辛料を用いたカレー料理がこの地域の食事を特徴づける料理となっています。飲料では、牛乳と砂糖を加えた独特の紅茶であるチャイが広く飲用されています。このように、地域的な多様性がみられただけでなく、インドや南アジアに共通しこれらの地域に統一性を与えるような文化的要素も少なくありません。衣や食だけでなく、宗教におけるヒンドゥー教やカースト制度もそのような性格をもっています。カースト制度はこの地域の社会を特徴づけています。カーストは社会をより数多くの小さな集団に細分する作用をもちますので、この地域の社会の多様性を増大させることにも関わっているといえます。

### （4） どのように地域区分できるか。

インドの地域的多様性を捉えるには、これまでの分布の考察に加えて地域区分による整理が有効です。まずインドを 2 地域に区分する捉え方を紹介します。

上の（3）でみたように、北部と南部の区分がまず重要です。地形的には、北の大陸部（山岳地域と平野）と南の半島部（高原）に大きく二分されます。また言語については、歴史的経緯によって北のヒンディー語圏

## 図表のページ

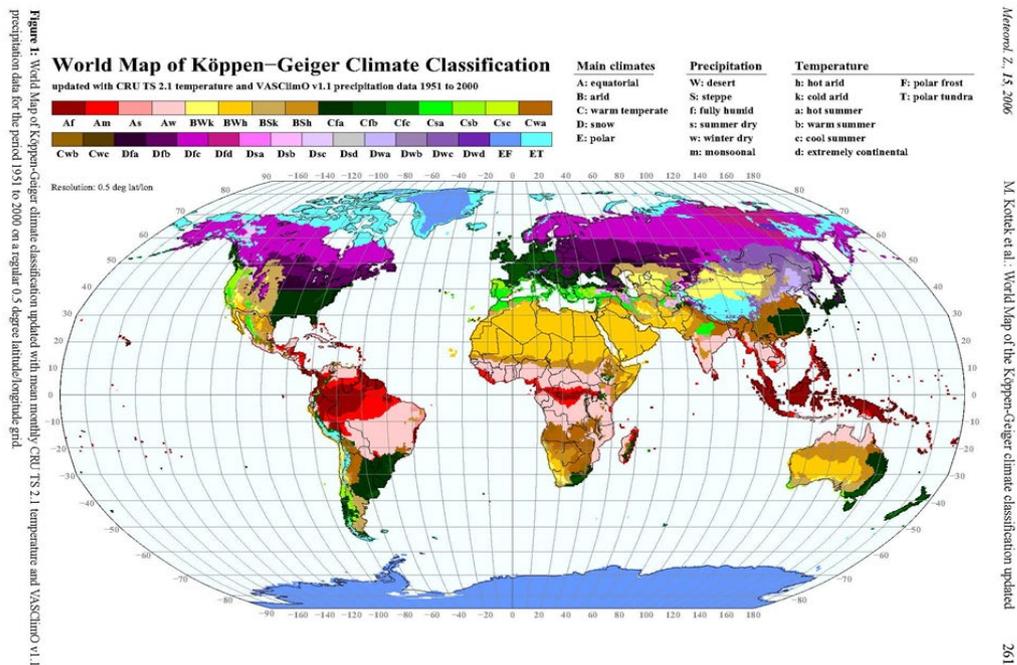


図2 ケッペンの気候区分

Kottek, Markus; Grieser, Jürgen; Beck, Christoph; Rudolf, Bruno; Rubel, Franz (2006) World Map of the Köppen-Geiger climate classification updated, Meteorologische Zeitschrift Vol. 15 No. 3, pp. 259—263. p. 261 Figure 1 引用 DOI: 10.1127/0941-2948/2006/0130 <http://dx.doi.org/10.1127/0941-2948/2006/0130> Open Access (paper may be downloaded free of charge) Download paper for free

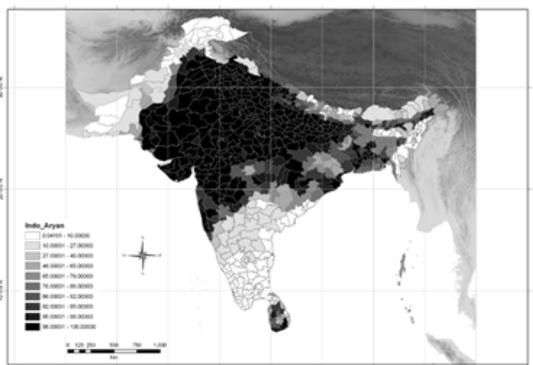


図3 インドのアーリア諸語の分布

大西正幸(2008)1. インド・アーリア諸語の分布, pp.169-172 の p.171 のインド・アーリア諸語の分布図引用

(大西 正幸, 児玉 望, 長田 俊樹, 高橋 慶治 (2008)南アジアにおける 4 言語グループの分布と特徴, 『環境変化とインダス文明』, 2007 年度成果報告書, 総合地球環境学研究所 インダスプロジェクト, pp.167-177.

<http://id.nii.ac.jp/1422/00000268/>

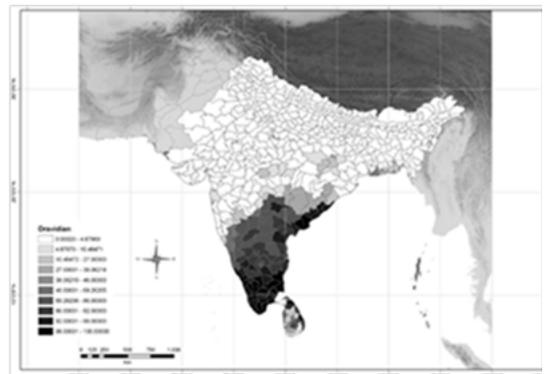


図4 インドのドラビタ語族の分布

児玉望(2008)2. ドラビタ語族, pp.172-174 の p.173 のドラビタ語族の分布図引用

(大西 正幸, 児玉 望, 長田 俊樹, 高橋 慶治 (2008)南アジアにおける 4 言語グループの分布と特徴, 『環境変化とインダス文明』, 2007 年度成果報告書, 総合地球環境学研究所 インダスプロジェクト, pp.167-177.

<http://id.nii.ac.jp/1422/00000268/>

と南のドラヴィダ語諸州という明瞭な差異も認められます。また社会組織（家族制度と女性の地位）の南北の差異も知られています。これは、性比の分布において、北部で男性の数が女性の数を上回り、南部ではその逆であるという対照性（図5 参照 URL 1）と関わりがあると思われます。この違いは結婚年齢の差異などを通じて女性の社会的地位にも影響を与えています。社会経済面でも南北の差異が認められ、特に、出生率と識字率（教育水準）（図6 参照 URL 1）における差異が明瞭です。前者は北高南低であり、それが人口増加率にも影響しています。他方、後者は南高北低で、人材育成に大きな差異を生じています。これらからすれば、南部の方が北部よりも経済発展に有利な条件を備えているといえます。二地域への区分では、東と西に分ける見方もあります。気候における西の乾燥と東の湿潤、それに対応して西の小麦作と東の米作という農業および食文化の違いがみられます。近年重要なのは、独立後の経済発展の東西間の違いです。両地域とも東部のコルカタ、西部のムンバイのように、沿岸部に植民地型の大都市を擁し、植民地期に大きな発展をとげましたが、今日では西部が成長著しいのに対し、東部は停滞傾向が鮮明になっています。西部では、東部に比べて、化学、石油関連工業などの成長産業の発展を集積させたことが重要な意味を持っています。

インドを内陸部と沿海部に二分する見方もあります。この地域差はもっぱら植民地期に形成されました。宗主国との関係が強固であった植民地では、一般に、沿海部に宗主国と植民地を中継する拠点都市が発達し、そこから後背地として内陸部の原料生産地を包摂する形の空間構造が形成されます。それゆえ、インドも植民地から独立した時点では沿海部と内陸部の間に工業発展の大きな格差がありました。独立後、地域開発政策により地域間の均衡ある発展を目指しましたが、この格差を十分には解消できませんでした。ただし、内陸部であっても、大都市デリーについては、行政都市から産業都市へ転換し、デリー首都圏（National Capital Region）として工業投資の核として成長し続けています。デリーは周辺にある諸州の一部をその影響下に巻き込みながら拡大を続けており、内陸部への経済的な波及効果がみられます。

以上のように3つの地域区分によって、インドの地域的多様性の大枠が把握できます。南北の区分は社会文化的な要因を含み、歴史的にも古く、他の二つは、比較的新しく、かつ政治的経済的な要因が作用しています。三つの考察を総合すると、高い出生率と高い貧困層の割合によりその存在が際立つ、北部のヒンディー語圏（ヒンディー・ベルト）の貧困地域は、北部インドの内陸部の問題として理解されます。その点で、この貧困地域の解消には、経済面だけでなく社会文化面の変革も必要となってきます。

上記の東西区分と南北区分を合わせると、全国を北部、東部、西部、南部の4つに区分することもできます。ここでの各地域は、等質地域としての側面だけでなく、機能地域（性格の異なる空間同士が中心点を核として機能的に結び付くことで形成される空間）的な性格も併せもっています。この4地域は、それぞれ中心的大都市を一つずつ有し、それを核とした地域内の機能的統合がみられますが、さらに四大都市相互による全国的ネットワークも形成されています。

#### （5）新たな地域格差が生まれていることを理解する

北インドの内陸部にあるデリー首都圏の発展は近年目覚ましいものがあります。そこで起こっているのは、急速な大都市の発展、産業集積の発展、都市農村間の結合の強化、都市ネットワークの発展などの空間的諸変化であり、郊外空間が急速な拡大をみせ、都市と農村の融合が進んでいます。こうした大都市を核とした広域的な成長地域がメガ・リージョンです。

フロリダは夜間の光量でインドのメガ・リージョンを抽出しています。「デリー＝パンジャーブ」（第1地帯）、「ムンバイ＝プネー」（第2地帯）、「バンガロール＝マドラス」（第3地帯）がみとめられます。現在日本とインド共同の地域開発として、デリームンバイ間産業大動脈構想が進められていますが、それは第1地帯と第2地帯のメガ・リージョンを連結し、メガ・リージョン間の流動の強化と沿線の開発をめざすものです。こうして、インドの西部に巨大な集積地域が発展することになりますが、この動きは、インドの東西格差を一層増大させることにつながり、地域格差の拡大と大規模な空間構造の再編につながっていく可能性があります。

## 図表のページ

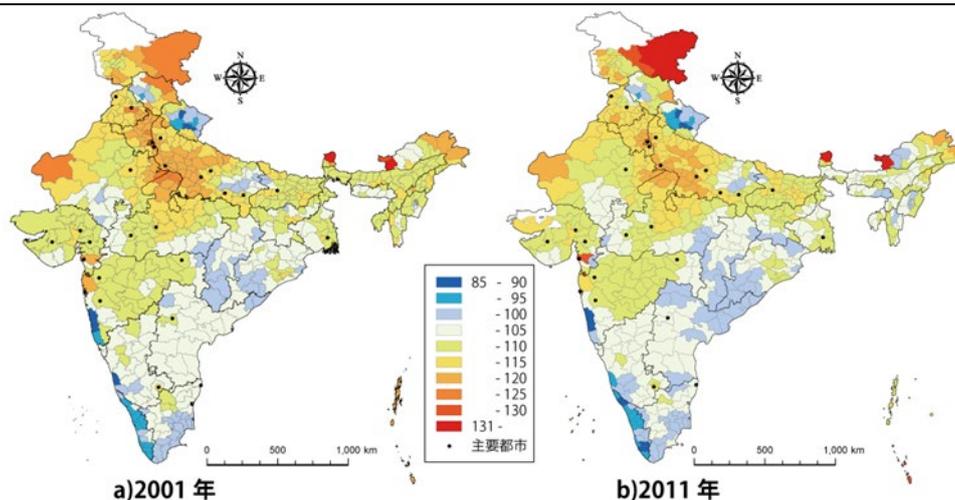


図5 県単位で見た性比の分布 注：女性100に対する男性の数を表す。

Sex Ratio, デジタルアトラス「インド2011年センサスと2001年センサスの比較」ver. 1.0,

HINDAS 広島大学現代インド研究センター [https://hindas.hiroshima-u.ac.jp/gis\\_database\\_1.html](https://hindas.hiroshima-u.ac.jp/gis_database_1.html) より引用、転載許可(2021年11月9日) 広島大学現代インド研究センター(2024年3月現在このHPは在りませ

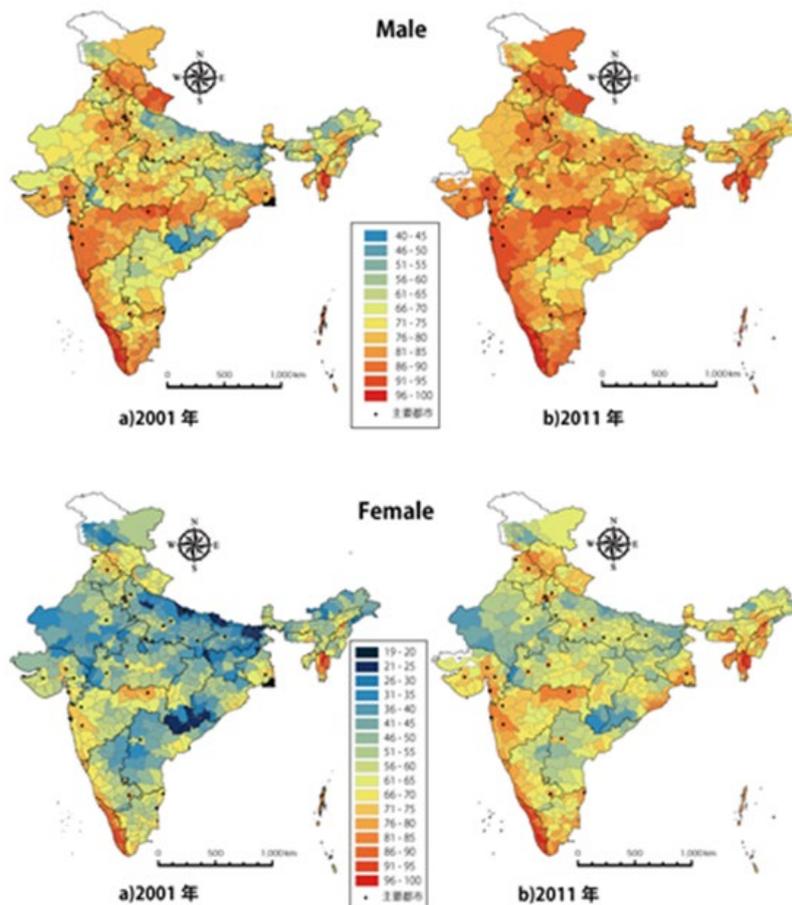


図6 県単位で見た識字率の分布

識字率, Literacy, デジタルアトラス「インド2011年センサスと2001年センサスの比較」ver. 1.0,

HINDAS 広島大学現代インド研究センター [https://hindas.hiroshima-u.ac.jp/gis\\_database\\_1.html](https://hindas.hiroshima-u.ac.jp/gis_database_1.html) より引用、転載許可(2021年11月9日) 広島大学現代インド研究センター(2024年3月現在、このHPは在りません)

## 参考文献

岡橋秀典 (2017) 「インドの地域的多様性と空間構造の特徴」 運輸と経済 77-8

岡橋秀典・友澤和夫編 (2015) 『現代インド4 台頭する新経済空間』 東京大学出版会。

Florida, R. (2008) Who's Your City, New York: Basic books. (井口則夫訳『クリエイティブ都市論—創造性は居心地のよい場所を求める』ダイヤモンド社、2009年

Kotttek, Markus; Grieser, Jürgen; Beck, Christoph; Rudolf, Bruno; Rubel, Franz (2006) World Map of the Köppen-Geiger climate classification updated, Meteorologische Zeitschrift Vol. 15 No. 3, pp. 259–263. DOI: 10.1127/0941-2948/2006/0130 <http://dx.doi.org/10.1127/0941-2948/2006/0130>

Open Access (paper may be downloaded free of charge) Download paper for free

大西 正幸, 児玉 望, 長田 俊樹, 高橋 慶治 (2008) 南アジアにおける4言語グループの分布と特徴, 『環境変化とインダス文明』, 2007年度成果報告書, 総合地球環境学研究所 インダスプロジェクト, pp.167-177.

<http://id.nii.ac.jp/1422/00000268/>

## 参照 URL 2024年3月参照確認

参照 URL 1 広島大学現代インド研究センター 2024年3月現在、このHPは在りません。

<https://hindas.hiroshima-u.ac.jp/database.html>

参照 URL 2. ウラジミール・ケッペン(1846-1940)とルドルフ・ガイガー(1894-1981)が発行した歴史的な論文や地図のコレクションを提供しているサイト

<http://koeppen-geiger.vu-wien.ac.at/>

参照 URL 3. 総合地球環境学研究所学術リポジトリ

<http://id.nii.ac.jp/1422/00000268/>